

日本ファンの維持・拡大と組織化の必要性

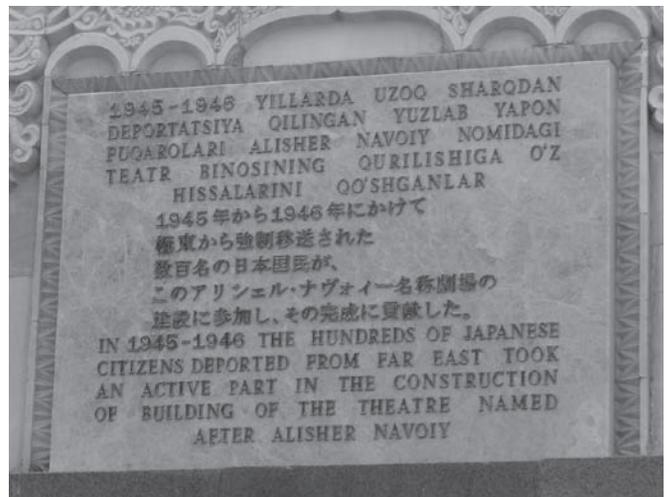
～ウズベキスタン、アゼルバイジャン、アルメニアで感じたこと、考えさせられたこと～

2015年11月から2016年3月にかけて、国際協力機構（JICA）の「モンゴル・中央アジア・コーカサス-北海道民間連携情報収集・確認調査」に従事する機会を得ました。この調査は、北海道の民間企業が、当該地域においてどのような分野で民間連携の可能性があるかを分析する基礎情報収集調査です。このうち、私はウズベキスタン、アゼルバイジャン、アルメニアの3カ国を担当。各国を2回ずつ訪問して調査を行ったほか、北海道企業と共に現地でセミナーを開催しました。ここでは、これら3カ国で調査した際に感じたことや考えさせられたことをお伝えしたいと思います。

まず、日本語を勉強している人が予想以上に多いと感じました。特に興味深かったのは、日本語を勉強するきっかけとして「両親から日本語の勉強を勧められたから」と回答した人が、（日本のアニメを挙げた人と同じぐらい）多かったことです。第二次世界大戦後、天然資源のないアジアの片隅の小さな島国の日本が奇跡的な復興を遂げ、世界第二位の経済大国にまで上り詰めましたことから、「日本語を勉強すればその秘密が分かるのではないか」と考える親世代が多いのです。特に、ウズベキスタンでは、第二次世界大戦後、日本人捕虜となった人々の献身的な働きによりオペラハウスが建設されたことも、日本語学習が熱心な一因になっています（オペラハウス記念碑＝写真）。

第二に、日本アニメの影響力の強さをあらためて感じました。アニメを機に、日本や日本文化に興味を持つ人も多くいます。日本語の意味が全く分からないまま主人公の日本語のセリフを繰り返したり、日本語の主題歌を歌ったりするのは少し奇妙な感じがしますが、外国語学習には大いに参考になると思います。

第三に、せっかく日本語を勉強しても、それを活用する機



ウズベキスタンのオペラハウス壁面に掲げられている記念碑

会がほとんどないということです。「日本と関わりのある仕事をしたい」「日本とビジネスをしたい」という情熱を持った人も多くいます。しかし、残念ながら現地に進出している日本企業は非常に少なく、日本語活用の機会がありません。それに関わらず、日本や日本語学習に対する情熱を維持しているのは感心しますし、日本人の一人として申し訳ない気がしました。

日本語や日本文化を学んでもそれらを活用する機会がなければ、やがて日本に対する関心や興味もなくなってしまうのではないかと危惧しています。実際、先進国では既に日本に対する興味や関心が低下していると感じます。私が米国のビジネススクール（経営学大学院）に留学した1980年代は日本の経済力が強く、日本の話をすればクラスメートは興味をもって聞いてくれました。しかし、最近ではその立場は中国に移っています。また、私が留学していた当時は中国本土からの留学生はゼロでしたが、最近では日本人よりも断然多く、同窓会に行っても中国パワーの大きさを感じます。

（文責：経済社会開発部 主任研究員 中山 和也）